

# 文化多元論とレトリックのつながりを求めて

——《ファイグーラ》から《認知》へ

吉田和久

はじめに

- 一 ヘイドン・ホワイトのフィギュララル・リアリズム
- 二 認知意味論の中動態論
- 三 文体論という視座から——《ファイグーラ》から《認知》へ
- 四 文体論のヴィーコ
- 五 結語——フィギュララル・リアリズムの前後を踏まえて

はじめに

現代アメリカの歴史哲学者・文化批評家ヘイドン・ホワイト（一九二八年―）は、近年《フィギュララル・リアリズム》Figural realism という歴史の表象の概念を提案している。フィギュララル・リアリズムとは、ありのままの事実とまったくの虚構との中間に想定される歴史の現実の表象形態である。ホワイトがフィギュララル・リアリズムを案出したのは、ホロコーストの表象をめぐるカルロ・ギンズブルグらとの一連の論争がきっかけであった。ホワイトは、フィギュララル・リアリズムのアイデアを比較文学者エーリッヒ・アウエルバッハ（一八九二―一九五七年）の

《フィグーラ》Figuraの概念に主として負っている。フィグーラとは、元々は西洋古典のレトリック（修辞学）の概念であるが、それはまた、アウエルバッハが比較文学の大著『ミメーシス』（一九四六年）において西欧文学の歴史全体を通観した際に、自らの文学史観のバックボーンとした歴史の概念でもある。ホワイトは、文学史観としてのフィグーラの射程を広げ、それを歴史一般の表象という問題にまで応用しようとする。しかし残念なことに、フィグーラル・リアリズムは十分に練られたアイデアであるとは言い難い。この論文で私は、ホワイトの達成を踏まえ、それを多角的に検討し、現代における文化多元論に資するものとして更に鍛錬したい。

私が議論の出発点としたいのは、フィグーラル・リアリズムの具体例として、ホワイトが西欧語文法の《中動態（中間構文）》を挙げていることである。中動態とは、能動形の動詞で受動の意味を表す、能動態と受動態の中間にある語法のことを指す。能動態と受動態の中間形態としての中動態はまた、事実と虚構の中間形態であるフィグーラル・リアリズムにも通じている、とホワイトは言う。しかし、このホワイトの議論はきわめて不十分である。そこで私が着目したいのは、中動態は近年、認知意味論やアフォーダンス理論といった、《認知》の視座を採る言語学や心理学によって新しい光が当てられていることである。認知科学は、中動態の性質を《探索活動》や《公共性》といった局面に突き止める。探索活動にせよ公共性にせよ、それらは歴史の表象や文化の多元性という問題群にも大いに通じていそうな概念ではあるまいか。《フィグーラ》や《フィグーラル・リアリズム》と《認知科学》との間には、どのような連関があるのだろうか？

この論文の前半では、フィグーラル・リアリズムのあらましを紹介し、それを認知科学の中動態（中間構文）論と突き合わせてみたい。後半では、歴史や文化の表象論と認知科学という、表立った形では同じ俎上に載せられたことのない二つの学問領野のあいだに隠れている連関を探ってみたい。私の観るところでは、認知科学と表象論の接点

は、《文体論》と《ヴィーコ》いう二つの局面に見出せる。

まず、《文体論》について。一方では、アウエルバッハやホワイトのような文化や歴史の表象に関する重要な著作を残した批評家たちは皆、観念論から構造論へと展開した二十世紀の文体論に深く関わっていることが確認できる。他方、文体論は二十世紀末以降、《認知》という視座から大きな発展を遂げつつある。文体論という媒介項を介在させることによって、歴史や文化の表象論と認知科学とを結びつけることが可能になり、更にまた、アウエルバッハやホワイトたちには何が見えていなかったのか、ということが明らかになる。

次に、《ヴィーコ》について。非常に興味深いことに、アウエルバッハ、ホワイト、そして認知科学は皆、十八世紀イタリアの哲学者ジャンバッティスタ・ヴィーコ（一六六八―一七四四年）の歴史・言語思想の影響を深く受けている。そして彼らのヴィーコ読解は、それぞれに観念論的（アウエルバッハ）、構造論的（ホワイト）、認知論的（認知科学）という特徴を持っている。彼らのヴィーコ観の相違を見定めることで、文体論全般をめぐる諸問題、特に、観念論や構造論（の文体論）に対して認知論（の文体論）が新しく登場してくる流れやその必然性などが明らかになる。

以上のような読解と議論を通して、歴史表象論や文化多元論は、《認知》の視座を導入することで更なる展開が図れるのではないか、ということを経験的に示唆したい。この論文の副題に付したように、《フィグーラ》から《認知》への道筋を描き出してみたい。

## 一 ホワイトのフィギュラ・リアリズム

ホワイトは、『ファイギュラル・リアリズム』という概念によって、事実と虚構の中間にある《何か》を表象する可能性を追究している。その具体例の一つとしてホワイトは、西欧語文法の《中動態（中間構文）》を挙げている。さて近年、中動態は、認知科学を取り入れた言語学者によつて、その特質が《探索》と《公共性》という局面に突き止められている。《事実と虚構のあいだの何か》と《探索・公共性》は大いに関係がありそうだが、両者のつながりは未だ説明されてはいない。前者の文化論的な志向と後者の言語論的なそれがどのように関係しているのかを考える必要があるようだ。

まずは、ホワイトのファイギュラル・リアリズムから始めよう。その内容、特徴、問題点について私は、他の場所においてアウエルバッハの《ファイグーラ》との関連で検討したことがある<sup>(1)</sup>。ファイギュラル・リアリズムの詳しい紹介についてはそちらをご覧ください。ここでは中動態に至るまでの流れを整理しておこう。

① ホワイトは「歴史解釈の政治学」（一九八二年）という論文において、歴史認識の《政治性》の問題を提起した。歴史の認識とはそもそも政治的なものであることが理解されるならば、例えば、ホロコーストをめぐる修正史観やシオニズムのようなイデオロギー的な主張や歴史観にも一定の意味が認められるべきだ、とホワイトは言う。

② このホワイトの主張に噛み付いたのが、歴史家であり、歴史叙述の理論家としても著名なカルロ・ギンズブルグ（一九三九年ー）——《マイクロ・ヒストリー》という歴史表象の概念を提示している——である。ギンズブルグによれば、ホロコーストについての様々な解釈の妥当性をホワイトのように政治性に求めるのは、かつてイタリアのファシズムを支持した哲学者ジョバンニ・ジェンティーレ（一八七五ー一九四四年）の議論の焼き直し

に過ぎない。事実と虚構（イデオロギー）はあくまでも峻別されなくてはならず、ホワイトの議論は、この点において決定的に誤っている、とギンズブルグは難じる。

③ ギンズブルグの批判を受けてホワイトは、歴史の表象をめぐる《事実》と《虚構》の関係の問題を更に探り、《フィギュラル・リアリズム》という概念を提唱するに至った。

④ フィギュラル・リアリズムの発想源は、アウエルバッハの《フィグーラ》である。フィグーラは元々は古典古代に起源を持つレトリックの概念であるが、アウエルバッハはそれを歴史（文学史）の概念へと転換させた。歴史観としてのフィグーラにおいては、時間的に前後して乖離する二者の間に、《予兆》と《成就》という一種の相関性が設定される。

⑤ このフィグーラ概念に示唆を受けたホワイトは、十九世紀リアリズム文学の《歴史》Ⅱ《事実》と二十世紀モダニズム文学の《歴史の拒否》Ⅱ《虚構》という一般に流布している対比を取り上げて、それに別様な解釈を与える。ホワイトは、リアリズムを《予兆》として、またモダニズムを《成就》として位置づけ、後者に一段高い地位を与える。つまり、《フィグーラ》としてのモダニズムがフィギュラル・リアリズムの主たる内実である。

⑥ フィギュラル・リアリズムのもう一つの発想源が、西欧語文法の《中動態》である。中動態は、言語論的には能動態と受動態のあいだの中間形態であるが、それはまた、哲学的には主体と客体のあいだの、表象論的には事実と虚構のあいだの中間形態であり、二項を媒介・調停する潜在力を持つ、とホワイトは考える。

さて、①～⑥の整理を踏まえて、ホワイトの言葉を実際に聞いておくことにしよう。まず、リアリズムとモダニズ

ムについてのホワイトの言及。

モダニズムとは、それ以前のリアリズムに対する反動であるというよりは、その成就である、とアウエルバッハはきわめて明確に特徴付けている。アウエルバッハは、文学的なモダニズムが歴史からの逃避であると提示することはしない。確かに、モダニズムの文体的かつ意味論的な主たる特徴についてのアウエルバッハの説明は、それが十九世紀の歴史主義を超越した、という主張と同じものである。しかしアウエルバッハは、モダニズムを十九世紀のリアリズムの更なる展開として、したがって、十九世紀のリアリズムが現実と歴史とを同一視したことの成就として——そしてそれゆえに、歴史の観念自体を更に鍛錬するものとして——解釈しているように私には思われる。歴史の拒否と見えるものは、その十九世紀の形態の更なるエラボレーションであり、それは、二十世紀中葉において成就され始める《フィグーラ》として、今や姿を現すのである。否定されているのは、歴史ではなく、その十九世紀の形態なのである。(2)

この一節では、モダニズムに対してフィグーラとしての高い地位が与えられていることに注目する必要がある。西洋文学史では通常、十九世紀のリアリズムとは現実をありのままに表現する手法である一方、二十世紀のモダニズムは現実を超えた表象を目指す手法であるとされている。この通説に対してホワイトは、アウエルバッハを援用しつつ、モダニズムはリアリズムへの反動ではなく、両者の間にはフィグーラ的な関係がある——予兆と成就という内的な関連が潜んでいる——と主張する。ここで注意すべきは、予兆と成就、つまり、リアリズムとモダニズムは対等ではなく、両者の間にはある種の優劣関係が成り立っていることであろう。「二十世紀中葉において成就され始める

《フィグーラ》というような表現からも読み取れるように、ここでホワイトが言う「フィグーラ」とは、二項間の内的な連関のことであるよりもむしろ、成就というより高い形で達成されるものの方に比重が置かれているようだ。この意味において、モダニズムは《フィグーラ》としてのモダニズムとも呼ばれた方が適切であろう。

そしてホワイトは、この《フィグーラ》としてのモダニズムはまた、歴史（ホロコースト）の表象の問題にも示唆を与えるかも知れない、と論を進める。

（前略）ホロコーストの表象をめぐる議論の中で遭遇される様々な逸脱、など、行き詰まりは、ホロコーストのような実際にはモダニズム的な出来事を表象するには不十分であるリアリズムに多くを負い過ぎている言説の概念が作り出した結果であることを示唆【したい】。(3)

（前略）モダニズム的な表象の様式は、他の如何なるタイプのリアリズムであろうとも説明が出来ないホロコースト【それ自体】とそれを経験することの両者の現実を表象する可能性を提供してくれるかも知れない。(4)

ホロコーストのような歴史的な事件は扱うのが極めて難しい。一方では、ホロコーストのような極端に政治的かつ非人道的な事件については、論者の価値判断を廃して、事実のみが中立公平で客観的な立場から記述されなくてはならない、とする一般に支配的な考えがある。他方では、ホロコーストなど実際にはなかった、という類の極端に主観的な議論も後を絶たない。このように、事実と虚構、あるいは客観と主観の間にあって、（ホロコーストの）歴史の表象は不安定である。問題をかく捉えるならば、リアリズムかモダニズムかという問題は俄然現実性を帯びてくる。そ

して、ここでホワイイトが提唱するのが、『フィグーラとしてのモダニズム』という見方を援用することである。フィグーラとしてのモダニズムは、単純に歴史を拒否しているのではなく、その中に予兆としての歴史をはらみつ、より高い次元での成就としての歴史の表象を可能にするものだからである。更に、この「モダニズム」は「中動態」と次のように橋渡しされる。

能動態と受動態においては、動詞の主語は、動作をする者、あるいは、される者として、その行為の外部にあると想定されているのに対して、中動態においては、主語はその行為の内部にあると想定されている。(中略) 文法的なモダニズムにおいては、「書く」という動詞が意味しているのは、能動的な関係でも受動的な関係でもなく、むしろ中動態的な関係なのである。(5)

ここでホワイイトは、①文法の能動態と受動態の対立が(文学や歴史の)表象における主観性と客観性の対立と平行関係にあること、そして、②主観性と客観性の調停という問題に対して、能動と受動の中間形態である中動態が示唆を与えるだろうことの二つの論点を主張している。なるほどこれは興味深い議論であろう。それであっても、その内実は大まかなアイデアの提示に過ぎず、十分な説得力を持つには至っていないことも確かである。例えば、その不分さの一端は、時間性の点などに指摘できるだろう。『リアリズム』と『モダニズム』の場合、両者は『フィグーラ』によって結ばれており、そこには、予兆と成就という時間的な前後関係(通時性)がある。それに対して、『能動態』と『受動態』の場合、両者のあいだに時間は介入せず、あるのはただ共時的関係のみであろう。そうした点を考慮せずに、中動態をフィグーラと単純に等価視できるのか、という疑問が湧く。ともかくここでは、ホワイイトの功績は主

として問題提起の次元にあるとするのが適切であろう。

以上が、歴史叙述の政治性の問題から始まり、調停案としての中動態に至るまでの議論のあらましである。この問題提起を承けて、歴史や文化の表象の領域における《フィグーラ》《モダニズム》《中動態》などの問題群はどのように展開されるべきなのか？

別の論考において私は、フィギュラ・リアリズムの第一の発想源であるアウエルバッハのフィグーラへ立ち戻り、この二つの概念の特徴や問題点を考察したことがある<sup>(6)</sup>。そのさしあたった結論は、《フィグーラとは《歴史主義》と《観念論》の一種奇妙な結合体であり、その奇妙な性格はフィギュラ・リアリズムにまで持ち越されているらしい》ということであった。歴史主義とは、過去と現在との直接のつながりを求める思想である。観念論は、歴史の総体を弁証法の視点からダイナミックに捉えようとする哲学である。このように両者は、同じドイツの地で育まれたものではあっても、その内実をかなり異にする歴史観である。そして、この相違についてアウエルバッハはあまり自覚していない風なのである。それであつても、フィグーラは成功した。それは、『ミメーシス』の規模雄大な文学史観を支え、更にまた、彼の現代文明批評の基盤ともなった。これに対して、フィギュラ・リアリズムは試論の域を脱し切れ切れていない。それは一つには、フィグーラの隠れた問題点——歴史主義と観念論の混交——をホワイトがあまりよく理解していないからではないか、と私は指摘した。このように私は、二十世紀終りの《フィグーラ・リアリズム》から二十世紀前半の《フィグーラ》へと遡る形で、いわば後ろ向きに問題の所在を探ったのであった。

さてこの論文では、今度は逆に前向きのアプローチを取ってみたい。つまり、文化批評に何かを教えてくれるかも知れない他分野の進んだ成果を参照したい。材料とするのは、ホワイトがフィギュラ・リアリズムのモデルの一

つとして挙げている中動態である。そして探究の手掛かりとするのは、認知意味論や生態心理学といった認知科学が中動態について示す知見である。ホワイトの中動態論は最前見た通り極めて中途半端なものだが、認知科学が中動態について示す洞察には一日の長がある感じである。認知科学は、言語や文化を人間と環境のあいだの《交渉》として位置づける志向を強く持っている。そして、認知科学は中動態について、それは《探索活動》の一種であり、また《公共性》を持つ、と教えている。こうした諸局面において、認知科学はフィギュラル・リアリズムに多くを教え、てくれそうである。

## 二 認知意味論の中動態論

ここで改めて、《中動態（中間構文）》とは何かを確認しておこう。中動態は、印欧語ではサンスクリット語や古典ギリシャ語にも見られるほど古くから存在する文法事象であるが、ここでは現代英語を例に取りたい(7)。“This car handles smoothly.”のような文を中動態（中間構文）と呼ぶ。同じ内容は“One can handle this car smoothly.”とも、あるいは、“This car can be handled smoothly by any driver.”とも書ける。つまり、中動態の文の内容は能動態でも受動態でもパラフレースできる。中動態の文は、動詞が能動形であるにも関わらず、意味の点では、受動形に近い。それであっても、中動態の文は、（先の例では）“by any driver”のような行為者を示す副詞句を付け加えることが出来ないという点で、受動態とは明確に区別される。これらが中動態の文法的特徴である。

それでは、この文法事象を認知科学はどのように分析するのだろうか？ 認知科学自体が比較的新しい分野であり、また現段階では、伝統的な人文学との距離も否めないことを鑑みて、まずは、認知科学（ここで関係するのは主とし

て認知意味論と生態心理学)の前提を簡単に整理紹介し、その後、認知科学が中動態について示す知見をみてみたい。

認知意味論と生態心理学の概要から始めよう。認知科学の領野では、言語学としての前者に心理学としての後者を接続させて、前者の議論を活性化させようとする動向がある(8)。

① 言語研究の二つの立場——言語能力について、現代言語学には二つの考えがある。一つは言語能力を《自律的なもの》モジュール》moduleと捉えるもので、生成文法がこの立場を採る。もう一つは、言語に限らない《認知能力》の全般が言語能力の形成に影響しているという考えがあり、認知意味論はこの立場を採る。

② 捉え方の意味論——認知意味論の基本的な姿勢は、《捉え方の意味論》というものである。これは、話者や認識表現者がどのような対象をどのように捉えて表現するのか、また、そうした捉え方を背後から支える認知のメカニズムは何か、という視点からの問題提起である。

③ 認知意味論と生態心理学の接点——認知意味論と生態心理学は《人間は身体を通して世界を知る》という視座を共有する。認知意味論は、身体と環境の相互作用の中に意味の発生の場を求めている。生態心理学は、事物の知覚と自己の知覚が相補的な関係にあると考える。

④ 認知意味論から生態心理学へ——認知意味論と生態心理学のあいだには相違もある。認知意味論は、言葉の意味は人間の側にある概念化の過程に存在すると考える。それに対して生態心理学は、事物の意味とは知覚者が主観的に構成するものではなく、環境の中に客観的に存在する何かだと考える。認知意味論の主観主義と生態心理学の客観主義はかく異なるゆえに、言語と身体の関係をめぐる、生態心理学の客観主義に拠った言語論が展開

されてもおかしくはない——すぐ後に見るように、生態心理学が言語論へ貢献する可能性の一つの局面が中動態論である。

⑤ アフォーダンス——生態心理学の中心概念の一つが《アフォーダンス》affordanceである。アフォーダンスは環境において事物と知覚者との関係として存在する、と生態心理学は考える。

⑥ アフォーダンスと探索——アフォーダンスを関係と捉える生態心理学は、知覚についても、人間の側が外部の刺激を受動的に受け取るものとは捉えない。生態心理学の考える知覚は、より能動的なものである。生態心理学は、知覚を成立させる知覚者の能動的な活動を《探索活動》と呼ぶ。知覚による情報の獲得の背後には、必ず探索の過程を観察することが出来る。

⑦ エコロジカル・セルフ——アフォーダンスの考え方の基盤にあるのは、環境の知覚と自己の知覚は相補的であり、世界を知覚することは同時に自己を知覚することだ、という認識である。こうして知覚された自己は《エコロジカル・セルフ》ecological selfと呼ばれる。エコロジカル・セルフは、能動的な移動に伴う環境の見えや、事物に対する能動的な働きかけの結果として生じる、その事物の見えに伴って知覚される自己のことである。

⑧ インターパーソナル・セルフ——生態心理学の捉える自己のもう一つの重要な局面が、《インターパーソナル・セルフ》interpersonal selfである。インターパーソナル・セルフは、他者に対する能動的な働きかけに対する結果として生じるもので、それはまた、自分が相対する人物の見えに伴って知覚される自己である。

⑨ 直接に知覚される自己と自己の公共性——エコロジカル・セルフとインターパーソナル・セルフを統合して、《直接に知覚される自己》directly perceived selfと呼ぶ。ここでは、他者を介して事物と関わり合い、事物を介して他者と関わり合うという共同注意に基づく三項関係（自己・他者・事物）が成り立っている。そして、この

三項関係はまた、『自己の公共性』へ連なってもいる。

ここまでが認知意味論と生態心理学の概要である。『探索』と『公共性』という論点をまずは押さえておいた  
だきたい。この整理を踏まえて次に、認知科学（特に生態心理学）の視座を中動態という言語形態に適用するならば、  
どのようなことが分かるのだろうか？

① 生態心理学の言語論への応用Ⅱゼロ形の意味論——話し手が自分自身を表現する方法には、一般的な一人称代  
名詞を使う場合に加えて、一人称代名詞を使わずに自分のことを表現する形式がある。これを『ゼロ形』という。  
② エコロジカル・セルフとゼロ形——ゼロ形においては、話し手は自分自身にとっての視野の中に含まれてはい  
ないが、話し手がその場に存在し知覚されていることは否定できない。これは、話し手がエコロジカル・セルフ  
の次元で知覚されていることを意味している、と生態心理学（の言語論）は考える。

③ ゼロ形の例——次のようなゼロ形の文（中動態ではないが）を考えてみる。“Kyoto is approaching.”客観的に  
見るならば、この文の動詞“approach”に対する主語“Kyoto”は、そもそも固定したものであり、それ自体が移  
動することはないので、この文は論理的ではないとされるかも知れない。しかし、視点を人間中心にし  
て、この文は新幹線が京都に向っている人物の経験を述べている——これを主体移動表現という——と考え  
てみよう。すると、この文は「京都が自分の方へ近づいている」という知覚経験を人間主体を中心に述べてい  
る」とも解釈できる。つまりこの文は、話者が「エコロジカル・セルフのレベルで捉えられているために音形の  
ある明示的な表現として文の中に登場してはいないが、ゼロ形として表現されている」と言える。(9)

④ 中動態の特徴 A Ⅱ 探索活動——例えば、次のような中動態の文を考えてみる。“Bureaucrats bribe easily.” 生態心理学の観点を採用して、この文はゼロ形であり、その見えない話者はエコロジカル・セルフの次元にあり、文法上の主語である bureaucrats は見えない話者に対してアフォーダンスの関係を持っている、と考えてみよう。するとこの文は、見えない話者が主語である bureaucrats に対して bribe という行為を通じて能動的に働きかけている様子（買収を持ちかけること）を描いていると解釈できる。この状況を敷衍説明するならば、「役人というのは、実際にやってみれば（買収してみれば）わかる（確認できる）ことだが、簡単に買収できるものだ」ということになる。<sup>(10)</sup> 生態心理学の用語を使えば、この文は一種の《探索活動》を表現している、ということになる。

⑤ 中動態（中間構文）の特徴 B Ⅱ 公共性——中動態の文においては、その知覚者は、明示されていない場合、話者または話者を含めた一般の人と解釈され得る。これは観察者の《公共性》の表れである。つまり、可能性としては誰もが知覚・行為者の立場に立てる、あるいは知覚者の立場に立つ可能性があらゆる人に開かれている、ということである。先の例で言えば、役人の買収は、《私》という特定の個人が意図しているものであるばかりか、それはまた、《一般の多くの人々》にも可能であることをこの文は示唆しているということになる。

以上が、中動態について認知科学が示す知見のあらましである。要点を繰り返せば、中動態は人間と環境とのあいだの交渉（インターアクション）という局面を反映していると捉えるならば、そこから導き出される中動態の特質とは、話者の対象への働きかけである《探索》であり、また、話者と他の話者との間に共有される《公共性》である、ということになる。

ここで、歴史表象論におけるホワイトの中動態への着目と、中動態の特質についての認知科学の知見を突き合わせることによって、議論の展望を切り拓きたい。前者が中動態に問うのは、人間が対象（歴史や過去）を認識する際に生まれる差異や食い違いを調停する手段として中動態が如何に機能するのか、ということであろう。後者が中動態について示すのは、環境の中にある人間が対象を認識しつつ自己のあり方をつくってゆくという一種の相互作用と中動態が関係しているということであろう。ここで考えてみるに、前者にあつて後者にないのは、《環境》というメタレヴェルの視座、あるいは、《交渉》や《相互作用》という局面において文法事象——延いては文化事象——を捉える視座ではあるまいか。

とするならば、次に問われるべきは、歴史認識は人間と環境の相互作用に如何に切り結ぶのか、ということであろう。だが、この問いはあまりにも大きく、また雑駁である。この問いにダイレクトに答える代わりに、ここでは一つの小さな思考実験を試みたい。ホワイトの《歴史》や《歴史家》を認知科学の《対象》や《話者》に置換してみるならば、何が言えるだろうか？

まず、この置換作業によつて〈歴史認識とは、《探索》であり、《公共性》を志向する〉という命題が誕生する。この命題を私なりに解釈するならば、次のようにならうか。第一に、〈歴史認識とは、過去に本当は何が起つたのかを突き止める作業である〉と考えるのでは十分ではない、ということが浮かび上がる。むしろ歴史認識とは、人間が歴史（過去）を《探索》する作業、つまり、歴史（過去）への《問いかけ》という未来志向の営為であると捉えた方がよい。これと関連しつつ第二に、歴史認識は《公共性》を志向する知的作業である、とも考えられる。歴史認識において自己と他者の見解が相違する場合であっても、その自己と他者は結局のところ同じ対象を見ており、ここで成立する《自己／他者／対象》の三項関係は何らかの共通認識への可能性を秘めているという点で、歴史認識とは《公

共性》を探る作業である、と捉えられるべきであろう。

〈歴史認識とは探索であり、公共性を志向する〉という視座は、歴史認識の難題に一つの風穴を開けているように私には思われる。歴史認識の政治性は常に難題であり続け、人びと——特に二十世紀中葉のホロコーストやファシズムを経験した後の世界に生きる者たち——を悩ませ続けている。そして、その議論の行き詰まりや沈滞に対して、認知科学は何か前向きなものを示唆している感じがする。またその射程は、歴史認識に留まらず、広く文化論一般——特に文化の多元性をめぐる議論——にまで及ぶだろう。そうした期待の一方で、少なくとも現段階においては、認知科学と文化論（歴史表象論）のつながりは弱く、これまでの議論の中では、かろうじて中動態という局面において接点を持っているに過ぎない。議論の更なる充実のためには、両者を結びつけるより強い妥当性が示されなくてはなるまい。私としても、議論を進めるべく、認知科学と文化論の接点を更に多く見つけたいと考える。この節ではこれまで、認知科学が文化論に教えるものに専ら着目してきたが、次なる二つの節では舵を逆向きにとり、少し前の文化論から最新の認知科学へと向う流れを追ってみたい。最初の手掛かりは、《文体論》である。

### 三 文体論という視座から——《フィグーラ》から《認知》へ

前節では、歴史や文化の表象の多元性という問いに対する一つのヒントを《認知》という領野に見出した。このことを踏まえて本節では、認知の視座の妥当性を、少し別の角度から探ってみたい。本節の中心テーマは、《文体論》である。文体論という媒介項を導入することによって、文化論（歴史表象論）と認知科学の乖離に架橋できる、つまり、《フィグーラ》から《フィギュラ・リアリズム》を経て《認知》へ至るまでの一筋の道をつけられる、と私

は考える。

本節では、二つの流れを確認し、それらを重ね合わせる形で議論を進めたい。

最初の流れは、もちろん《文体論》である。この議論においては、二十世紀西洋で生まれた文体論の三つの主要な学派——観念論、表現・構造論、認知論——が重要となる。観念論の文体論は二十世紀初頭のクローチエ美学を基盤に形成されたもので、アウエルバッハのフィグーラ概念もこの圏内にある。表現・構造論の文体論は、ソシユールの弟子であるバイイに始まり、その後七〇年代を中心に、構造主義言語学や文化記号論と結びついて隆盛を誇った。そして、二十世紀の終りになって、認知論の文体論が登場した。認知論の文体論は、人間の言語認識と身体の関係に着目する点の特徴である。

二番目の流れは、歴史哲学者・文化批評家としてのホワイトの著作の展開である。私はこれを三つの時期——初期、中期、後期——に区分する<sup>(11)</sup>。初期ホワイトは、クローチエのリベラリズムの影響を強く受けていた。中期ホワイトは、『メタヒストリー』（一九七三年）などにおいて、歴史叙述の記号論的分析という新しい分野を切り拓いた。後期ホワイトは、歴史表象の多元性の問題を追究し、フィギュラール・リアリズムの概念を提示した。

二つの流れをこのように整理した上で重ね合わせるならば、フィギュラール・リアリズムの問題がどこにあるのかということ、更に、その先へと進むためのヒントの一つが認知の視座にあることが自ずと明らかになる。

まず問題について。フィギュラール・リアリズムの理論的基盤をアウエルバッハのフィグーラに求めているホワイトは、二十世紀西欧の文体論の流れをいわば《逆行》しているといえよう。それゆえに、フィギュラール・リアリズムはまた、フィグーラに内在する問題——主としてクローチエに由来する観念性——を引き継いでいる、ということが浮かび上がってくる。次にヒントについて。フィギュラール・リアリズムの議論が袋小路に陥っている原因の一部

がそうした《遡行》という方向にあることに観る私は、問題解決の方途の一つとして、文体論の流れを《順行》することもあり得るのではないかと考える。つまり、歴史や文化の表象の多元性をめぐる議論に示唆を与えてくれるのは、フィグーラ（の観念性）もさることながら、認知（の身体性）の視座なのではないかと私は考える。この二番目の論点（ヒントの局面）において、本節の議論は前節のそれとつながり、前者は後者を文体論という観点からバックアップすることになる。以下、更に詳しくみてみよう。

#### ① 観念論の文体論、クローチエ、初期ホワイト

西洋における文体論の歴史は古典古代のレトリックにまで遡るほどの古さを持つが、二十世紀初頭において、対極的な二つの大きな学派が形成され、その後の文体論研究の流れを決定した。一つは観念論の文体論であり、もう一つは表現の文体論である<sup>(12)</sup>。この項では、前者とフィグーラの関係に焦点を当てよう。

観念論の文体論学派がその理論的基盤としたものには、二つの哲学が挙げられる。一つは——その名が端的に示すように——シュレーゲル兄弟などの十九世紀のドイツ観念論の美学であり、もう一つは二十世紀のクローチエ美学である。

ドイツ観念論の美学によると、芸術には「一個の根本的な美的特徴が存在」し、その「特徴が芸術の創造行為全般を規定している」という。芸術を研究する者にとっての課題は、そうした特徴が個別の作品において如何に独自に構造化されているかを明らかにすることである。ここから次のような二つの帰結が導かれる。一つは「芸術の形式は文化的に限定を受けた美的変調の一部を内に蔵している」ことであり、もう一つは、そのように「文化的に限定された美的変調は、その文体的営為のなかにそのまま解読することができ、分析することができる」ことである。これはま

た、「芸術的創造行為と一体となった内在性」を想定することであり、「この内在性は（中略）解読の手段によって分析と発見の対象となる」と考えることでもある。そして、この分析こそが（観念論の）文体論の仕事となる<sup>(13)</sup>。

観念論の文体論はまた、イタリアの哲学者ベネデット・クローチエ（一八六六―一九五二年）にもまた、その理論的基盤を負っている。クローチエは、十九世紀西欧の人文諸科学における主要なパラダイムであった実証主義や自然主義を強く批判しつつ、自らの新観念論の哲学を確立した。クローチエは、『美学』（一九〇二年）において、「人間の認識活動を概念的なものと同観的なものに分け、後者に独立と優位をあたえ、言語の本質を直観であると説き、直観的認識を本領とする美学と言語学との同一性」を説いた<sup>(14)</sup>。言語学（哲学）の基盤を直観や美学に置くとは、言語（生成）の基底には《表現》（あるいはポイエシース）があるとする考えである。クローチエ美学とドイツ観念論のつながりについては従来あまり明確にされてはこなかったのだが、ドイツ観念論が説く美の《内在性》という視点が、クローチエによって内在性の表出としての《表現》として練り直された、と考えれば、両者は整合性を持つだろう<sup>(15)</sup>。

こうした――まことに観念論的な――美学に影響を受けた二十世紀初頭のドイツの文芸批評家たち――カール・フオスラー（一八七二―一九四九年）、レオ・スピッツァー（一八八七―一九六〇年）など――は、言語学や文献学における十九世紀的パラダイム（実証主義や科学主義）を激しく批判しつつ、彼らの《言語美学》<sup>16</sup> 《観念論の文体論》を作り上げた。彼らの実践は、「一種の文体批評であり、表現とその表現を創作し使用する個人や集団との関連を研究する」もので、言語分析と文芸批評が一体化しているという点が何よりの特徴である<sup>(16)</sup>。アウエルバッハもまた、この観念論の文体論学派の代表的な批評家である。よく知られているように、『ミメーシス』の各章は、長文のテキストの引用とそこに見られる文体的な特徴についての詳細な分析で始まる。その分析は、単なる分析のための

分析に終わることはなく、最終的にはそうした表現を生み出した各時代における文化と社会の特徴についての巨視的な考察へと通じている。この点において『ミメーシス』は、まことに観念論の文体論の代表的業績と呼ばれるにふさわしい。

そして、その『ミメーシス』の屋台骨となるのが他ならぬ《フィグーラ》の概念であるが、それもまた、観念論に色濃く彩られている。フィグーラは元々は古典古代に起源を持つ古いレトリックの概念であるが、アウエルバッハはそれを歴史の概念に転用し、『ミメーシス』（特に前半）における西洋古代から中世にかけての文学史の展開を分析する際に、フィグーラをその基盤に据えた。フィグーラをめぐるこのレトリックから歴史哲学への転換をアウエルバッハに促したものは何なのか？ それは、アウエルバッハ自身の説明に拠る限りでは、『ドイツ歴史主義』——ヘーゲルの弁証法的な歴史哲学に反対し、過去と現在とのあいだに直接のつながりを求める思想——である<sup>(17)</sup>。だが、近年のアウエルバッハ研究によると、それはまた《観念論》でもある、という<sup>(18)</sup>。彼に影響を与えた観念論の思想とは、主としてヴィーコとヘーゲルの哲学である。ヴィーコは、デイルタイなどの近代解釈学的な意味における《現在からの過去の再構築》という問題を既に十八世紀イタリアの地で提起した歴史哲学者である。また、前後する二つの要素がより高い次元で総合されるというフィグーラの時間構造には、ヘーゲルの弁証法的な歴史哲学との類似が認められる。そしておそらくは、ヴィーコとヘーゲルをつなぎまとめる形でアウエルバッハに直接の影響を与えたのは、クローチエであったのだろう。クローチエは、人間の想像力を知性の桎梏から解放し、それを直観という形で理論化する契機をヴィーコから、また、絶対的な観念論や弁証法思想をヘーゲルから受け継いでいる。アウエルバッハは、クローチエの『ジャンバッティスタ・ヴィーコの哲学』（一九一一年）のドイツ語訳者であり、この書物の特質である《絶対的観念論》から影響を受けていないとは考えにくい<sup>(19)</sup>。かようにフィグーラは、レトリックという元々の

言語論的な側面を残しながらも、また観念論哲学に色濃く彩られているという点において、観念論の文体論の特質を典型的に示している。

さてここで、従来あまり指摘されることはなかったものの、この議論に関連する論点を付け加えておきたい。それは、クローチエ哲学の初期ホワイトへの影響である。しかし、ホワイトのクローチエへの関心は、言語美学や文体論の領域ではなく、むしろクローチエの《自由の哲学》にあった<sup>(20)</sup>。

すぐ後に見るように、中期ホワイトが構造論の文体論という領域で目覚しい達成を示したことを考えると、初期のホワイトがクローチエに関心をもちつつも、(観念論の) 文体論に言及しないのは不思議でさえある——アウエルバッハへの言及は少し見られるのだが。もしかしたら、初期ホワイトは観念論の文体論との対決を秘めつつ、初期から中期へと自らの思想を鍛錬させていったのかも知れない。ともあれ、初期ホワイトのクローチエへの関心は長くは続かず、中期では、クローチエへの関心は批判へと取って代わられる<sup>(21)</sup>。それ以降、ホワイトがクローチエに戻ってくることはない。それでも意外なことに、クローチエ(絶対的観念論)とのつながりは伏流となつて続いたとも見れそうである。なぜならば、ホワイト自身は全く自覚していないようだが、私が見すように、後期ホワイトがフィギュール・リアリズムの概念を練る際に依拠しているのが、クローチエ美学の圏内にあるアウエルバッハのフィグーラであるからだ。

② 表現の文体論、構造論(記号論)の文体論、中期ホワイトの『メタヒストリー』

二十世紀西欧において、文体論の領野では、観念論と拮抗するもう一つの流れがあった。それは、ソシユールの高弟であるシャルル・バイイ(一八六五—一九四七年)が唱えた《表現の文体論》に始まり、ローマン・ヤコブソン

(一八九六―一九八二年)などの《構造論の文体論》(記号論)へと続く流れである。

観念論の文体論がドイツの地で生まれたのと同じ頃、フランスやスイスなどの仏語圏では、バイイなどソシユール周辺の言語学者たちが――ドイツの仲間たちと同じように――十九世紀の言語学の諸傾向(科学的、唯物論的、決定論的、歴史主義的など)に反対しつつ、新しい運動を立ち上げた。彼らは「ことばを物理的世界の不動の法則に支配される物質的な実体と見なすことを拒否」し、「ことばとはコミュニケーションの道具であり、思考の伝送のための記号の体系である」と考え、思考と言語の関連の探究へと乗り出した<sup>(22)</sup>。彼らは「文法の心理学・社会学に関心を寄せ、言語体系の内部で、言語記号(音、語、統辞構造など)とそれによつて表現される思考との関係」を考察する<sup>(23)</sup>。このようにして彼らは、自らの言語学の中心に《表現》という視座を据えた。表現を探究するために彼らが着眼するのは、「同一の観念に対して表現手段がいくつもありも存在する」ことである<sup>(24)</sup>。これが《文体的価値》と呼ばれるものである。こうして彼らの言語学は《表現の文体論》へと展開して行く。表現の文体論は、「言語にもちいられるいくつかのこととなった表現手段の、特有の表現的価値と印象的価値を研究する」<sup>(25)</sup>。バイイの言葉によれば、「文体論は組織的言語活動の表現的事実をそれらの情感的内容の観点から研究する、つまり言語活動による感受性事実の表現ならびに言語活動の感受性に及ぼす作用を研究する」<sup>(26)</sup>。ここで「感受性」という語が繰り返されていることから分かるように、バイイが研究対象とするのは、人間の言語活動のなかの情感的側面である。バイイは、「文学的天才の個人的創造はさけて、専ら一般民衆の自発的な表現をとりあげる」<sup>(27)</sup>。しかし、言葉の情感的内容についても、それは「ある与えられたひとつの局面のなかに反映している情意状態」ではなく、「主として言語構造とその表現的価値一般」に見られるものである<sup>(28)</sup>。この意味において、「言語活動の情感喚起的性能を「表現性」(expressive-ite)」と称し、その機能を明らかにしようと「する表現の文体論は、ラングの文体論である」<sup>(29)</sup>。つまり、ソシユール

言語学の基本テーゼに従って、言語活動（ランガージュ）の個人的使用を言（パロール）と呼び、その社会的所産を言語（ラング）と呼ぶならば、バイイの表現の文体論はパロールの文体論ではなく言語（ラング）の文体論であるのだ。

表現の文体論はその後、ローマン・ヤコブソンなどの構造論の文体論へと発展的な展開を遂げるのだが、両者は《言語論的還元主義》という局面において連続性を持っている。バイイもヤコブソンも共に、「コミュニケーションの多様な局面——詩的な性格、表現性、レジスター（特有な言語の使い方）など——は、言語のコード（これはヤコブソンの用語で、バイイのラングに相当する）の特徴的な局面を分析することによって説明される」という共通の前提に立っている<sup>(30)</sup>。二人は共に、①「発話や文章のコミュニケーション的な妥当性・関連性 (relevance) は無から (ex nihilo) の創造ではなく」、②「この関連性は組織化された現象の特徴的なシステムの中に源泉を持ち」、③「そうしたシステムとは、コミュニケーションのために用いられる言語のことに他ならない」と考える<sup>(31)</sup>。これらが両者に共通する《言語論的還元主義》の諸局面である。

さて、ヤコブソンの新しさは、バイイが《表現》という概念で探ったものをヤコブソンが《詩的言語（言語の詩的機能）》を説明するという形で追究したことであろう。ヤコブソンによれば、あらゆるコミュニケーションは、次の六つの要素を含むとされる——①発信者、②受信者、③コンテキスト（メッセージの志向対象）、④メッセージ（発信者と受信者のあいだで交わされる）、⑤接触（コミュニケーションの物質的媒体）、⑥コード（メッセージを了解可能にする）。これら六つの要素は、具体的なコミュニケーションの場面において、それぞれが際立つことがある。そうした場合の特徴はそれぞれ、①感情的、②動能的、③指示的、④詩的、⑤交話的、⑥メタ言語的となる。ここで注目すべきは、④の詩的言語の場合であろう。詩的言語においては、コミュニケーションはメッセージそのものに焦点

を絞っている。つまり、詩的言語は「自己意識的なもの、つまり自らの性質、すなわち自らの音型、語法、統語法などに何よりもまして注意をひきつけ、自らを越えた何か「現実」とまず関係を持つ」とはしない<sup>(32)</sup>。この時、誰が如何なる目的で何を話しているかに関係なく、言葉それ自体が私たちの意識のなかで《前景化》される。詩的言語は「自己を指し示すものであり、その様式こそが主題」である<sup>(33)</sup>。

言語の詩的機能に関するヤコブソンの理論——詩的言語においては言語が言語自体に対して自意識的な関係にあるとする考え——では、《言語の両極性》の概念もまた重要となる。ヤコブソンは、ソシュールの《パラダイグマテック》(連合的)《paradigmatic》と《シンタグマテック》(連辞的)《syntagmatic》の区別を受けて、《隠喩》と《換喩》の区別を提起する。この二つの比喩の型式は、二つの異なった実体を同じもの(これが比喩の主題となる)として提示する点において、《等価》の原理に立っているが、以下のような点で違いがある。隠喩においては、一つの記号はもう一つの記号で《代用》される。これは、一方が他方に類似しているからである。対して換喩においては、一つの記号はもう一つの記号に《連接》される。これは、両者のあいだに近接上の連想の関係があるからである。隠喩は一般にパラダイグマテックであり、言語の垂直の関係をを用いるが、換喩は一般にシンタグマテックであり、言語の水平の関係をを用いる。ヤコブソンは、隠喩と換喩を二項対立の関係にある両極的な様式と考え、この二項対立が更に、《選択》と《結合》という言語記号の生成のプロセスを支えるとする——「与えられた発話(メッセージ)は、あらゆる可能な構成素の貯蔵庫(コード)から選択された構成要素(文、単語、音素など)の結合である。」<sup>(34)</sup>この区別を根拠として、言語の詩的機能についてのヤコブソンの有名な定義が生まれる——「詩的機能は等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する。」<sup>(35)</sup>あるいは、次のような一節も同じようなことを述べている。「近接性の上に類似性が重ねられることによって詩は完全に象徴的、多様で多義的な本質を得ることになる。(中略)詩においては近接性の上

に類似性が重ねられる結果、どの換喩も幾分隠喩的であり、どの隠喩も換喩的な色彩を帯びている。」<sup>(36)</sup>そして、二つの比喩のどちらが際立つかによって、文学の様式の特徴が決まるともヤコブソンは言う——隠喩様式は詩において前景化し、換喩様式は散文において前景化する。このようにして、詩的言語の特徴を《隠喩》と《換喩》というレトリックの概念を使って鮮やかに説明したところに、ヤコブソン詩学の革命性がある。

さて、ここでホワイトに言及するならば、中期ホワイトの代表的著作『メタヒストリー』は、構造論の詩学Ⅱ文体論の圏内にあることを確認しよう。ホワイトは『メタヒストリー』において、歴史叙述をレトリックの観点から分析した。彼は、十九世紀西欧の歴史家たちの作品を、メタファー（隠喩）、メトノミー（換喩）、シネクドキー（提喩）、イロニー（反語法）という四つに分類し、更に、この四つの比喩がそれぞれの作品におけるプロットの組み方、議論の仕方、イデオロギーの形態などに影響を与えているとする。隠喩は、プロットとしては空想的であり、議論の仕方は形態論的であり、イデオロギー的にはアナキズムと相性がよい。以下、組み合わせる要素だけを列挙する。換喩は、悲劇的、機械論的、ラディカリズム。提喩は、喜劇的、有機体的、保守主義。反語法は、風刺的、コンテクスト的、リベラリズム。そして、それぞれの分類に対応する代表的な歴史家は、メタファーがミシュレ、メトノミーがトクヴィル、シネクドキーがランケ、イロニーがブルクハルトとなる。このように歴史哲学や歴史叙述論の領野にレトリックという言語論的な視座を導入することによってホワイトは、それまでやや沈滞の気味であったこの領野を一気に活性化させた。

ホワイトによると、『メタヒストリー』の分析手法の基盤を提供したのは次のような書物であるという——四つの比喩のモデルについては、ケネス・バークの『動機の文法』（一九四五年）とジャンバティスト・ヴィーコの『新しき学』（一七二五年）、また、プロットの組み方の区分モデルについては、ノースラップ・フライの『批評の解剖』

(一九五七年)。だが私としては、『メタヒストリー』の分析手法は大局から見るとヤコブソンなどの構造論の詩学Ⅱ文体論の流れに倣していることに着目したい<sup>(37)</sup>。ホワイト(ヴィーコⅡバーク)のレトリック論が比喻を四つに分類するのに対して、ヤコブソンのそれは二つであるという根本的な違いがあるにせよ、両者が近いものであることは見紛うべくもあるまい<sup>(38)</sup>。ヤコブソンがあのように比喻の理論を鍛錬しておいてくれたゆえにこそ、ホワイトがバークやヴィーコのレトリック論に文体論という視座から新しい光を当てるのが可能になった、と考えるべきであろう。特にヴィーコに関しては、その感が強い。ヴィーコは長い問いわば忘れられた思想家であったのだが、ホワイトは、そのヴィーコの優れて言語論的な歴史哲学が現代的な記号論に通じていることを見出し、ヴィーコの再生復活に成功した。ホワイトはいわば、現代におけるヴィーコ・ルネサンスの最大の功労者の一人である。そして、このヴィーコ再評価が可能になったのは、ホワイトの鋭い洞察力もさることながら、ヤコブソン詩学が隠喩と換喩の二元論を整備し、更に重要なことには、レトリック論を文化論の領域にまで応用する下地を作っておいてくれたからである。

中期ホワイトと構造論のつながりについて、もう一つ確認しておきたいことがある。それは、中期ホワイトの《歴史の詩学》は、一般に理解されているように《構造主義の》記号論の議論であるばかりか、また《文体論》の実践でもある、ということである。最前概観したように、構造論の文体論は表現の文体論から発展してきた。(ヨーロッパの)記号論の祖がソシユールであるように、構造論の文体論もソシユールⅡバイイがその起源である。ホワイト自身は、構造論の詩学(文化記号論)という視座には極めて自覚的なようだが、《文体論》という表現はあまり使わないし、ましてや構造論の文体論に先立つ表現の文体論にまで言及することはない。『メタヒストリー』だけを読んでいる限りではそれでもよいのかも知れないが、文体論という視座は、フィギュラル・リアリズムの方には大いに

関わっている——繰り返すように、フィギュラ・リアリズムは大局的には観念論の文体論の領野で発想されていると私は観ている。つまり、文体論という視座を採用すると、中期ホワイトの構造論と後期ホワイトのフィギュラ・リアリズム（ここに前期ホワイトのクローチエ流の《自由の哲学》を緩やかに加えてもよいかも知れない）とのあいだに隠れている有機的なつながりを見出すことが出来ると思われる。いや、少し議論を急ぎすぎたようである。これは本節全体の結論でもあるので、後で改めて言及することにした。

③ 一九八〇年代以降の言語論（文体論）と文化論の動向——《認知論の文体論》と《文化の政治学》

一九八〇年代に入ると、それまで有力であった人文諸科学のパラダイムに対する批判が次々に提出されるようになり、言語学や文体論、また、文化論の領野においても新しい方向が模索された。その成果は多岐にわたっているが、私の議論では、二つのことが重要となる。一つは、言語科学の領野では、生成文法への反発から《認知意味論》が登場し、その後、認知（言語学）の視座が文体論にも応用されつつあること。もう一つは、文化論の領野において、構造主義がポスト構造主義の様々な思想によって批判されたこと。特に歴史の表象論の領野では、中期ホワイトが関わった構造的な分析方法はその静態性が批判され、人びとの関心は歴史を書くことの《政治性》というような動態性を孕んだ主題へと移っていったこと。それぞれの場合を概観してみたい。

構造主義が人文諸科学の最先端のパラダイムの座を明け渡した八〇年代以降、言語学と文体論を結ぶ形での議論は、近年の認知論の文体論の展開まで待たねばならなかった。まず、言語学における構造論から認知論への移り変わりを簡単に辿っておこう。この問題を考える場合、認知意味論は二十世紀西欧において主流の座を占めていた言語学派を批判しつつ登場してきたことを押さえておく必要がある。ソシユール言語学（構造主義言語学）にせよ、チョムス

キーなどの生成文法にせよ、二十世紀言語学の主流学派は、言語を《言語記号のシステム》という自律的なものと捉え、言語を操る主体や言語を取り巻く社会環境と言語自体を切り離す傾向を強く持つ。このことは、主流学派を代表する概念——ソシュールの《恣意性》arbitrariness やチョムスキーの《モジュール》module など——はまず何よりも科学的であり、客観的であることを志向とすることに見て取れる。これに対して認知意味論は、言語を操る人間という主体に備わった認知能力や身体性という視座から言語を捉えようとする。そして、この人間中心な視座に立てば、言葉の意味は固定したものではありえない。ある事物がある人間が言語を通して捉え意味づけを行う場合、捉える人間が異なれば、あるいは、その捉える人間を取り巻く環境が異なれば、それに応じて捉え方も異なり、更に、捉え方が違えば、必然的に意味も異なるからである。意味は唯一絶対ではなく、意味は誰が何をどのように捉えたのか、あるいは、語ったのか、という具体的な状況と切り離せないことを強く自覚している点において、認知意味論は相対主義に立脚する学問である。

構造論以降の文体論の動向はどうだろうか。言語学と同じように文体論においてもまた、認知科学の視座を導入する新潮流が——特に近年——広まりつつあるが、文体論の場合、認知論が登場するに至る事情は言語学の場合とは少し異なっており、その歩みは少なからずジグザグに見える。ここでは、認知論の文体論や認知詩学が提起され広まったのが主として英米圏であることを踏まえて、二十世紀英米圏での文体論の歴史的展開を簡単に辿っておこう。既に見たように、二十世紀中葉に至るまでの独仏の文体論は基本的に言語学と手を携えて発展してきたのだが、英米においては必ずしもそういうわけではなかった。例えばイギリスの文体論は、一九三〇—四〇年代のI・A・リチャーズやF・R・リーヴィスの文学批評が出发点であるとされ、その後の文学的文体論（ドナルド・デイヴィー、クリステイン・ブルック・ローズ、ウニフレッド・ノヴォトニー、イアン・ワット、デイヴィッド・ロジなど）に至る

まで、文学作品の鑑賞・分析——精読をモットーとする——が中心となり、言語学とのつながりは薄かった。そうしたなかで六〇年代になると、J・R・ファースやM・A・K・ハリデイといった言語学者たちは、「状況的脈絡」といった言語理論（体系・機能文法）を文体分析に応用し、「言説が発生する状況やその文脈的な意味を中心的な関心事」とするイギリスの言語学的文体論を開始した<sup>(39)</sup>。この流れはその後、R・クワークやR・ファウラーといった著名な学者へと引き継がれた。このようにして、イギリスの文学批評の伝統である精読とイギリス独自の（観念論でも構造論でもない）言語学の二つの流れが合わさり、イギリスの文体論は展開して行ったが、それと同時に八〇年代以降、『教育的・実践的文体論』という動向も一部ではあった。そして、言語学における認知論の勃興を受けて、世紀の変わり目あたりから次第に、認知論の文体論（認知詩学）が文体論の新機軸として注目を受けるようになってきた。以上が、英米の文体論の領野において認知論が登場するまでのおおよその道筋である。

引き続き今度は、構造論以降の文化批評の動向を歴史の表象論に絞って簡単に整理しておこう。構造主義を乗り越えようとする様々な動向は一括してポスト構造主義と呼ばれるが、そうした動向のなかで最も影響力を持ったのが、脱構築主義である。脱構築主義は、構造論の静態性を批判し、記号生成の動的な側面を強調し、言説のイデオロギー性を暴露しようとする。歴史の表象論の場合でも、脱構築主義者は『メタヒストリー』の分析手法には（文化）記号論の静態性がまさに反映されていると攻撃した<sup>(40)</sup>。そして八〇年代以降、歴史の表象の動態論（脱構築）的分析は、『歴史を書くこと』の政治性』という方向に追究された。この動向には、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』（一九七八年）のような書物が大きな影響を持った。植民地主義や帝国主義と歴史叙述の共犯関係は、カルチユラル・スタディーズやポストコロニアリズムなど政治的な志向を強く持つ文化批評——以下では『文化の政治学』と一括する——において、中心的な主題となった<sup>(41)</sup>。歴史叙述が植民地主義や帝国主義に加担しているとはつまり、

歴史を書く者（西洋、男性、支配階級など）と書かれる者（非西洋、女性、非支配階級など）とのあいだに不均衡が存在するという問題の指摘である。この不均衡はまた、近代のナショナリズムとも不可分の関係にあるとされる。文化の政治学は、こうした不均衡を暴露し、ナショナリズムを脱構築しようとする<sup>(42)</sup>。

歴史叙述の脱構築をめぐる議論の良い例は、私たちが既に見たホロコーストの表象をめぐる論争であろう。ここでは、何が本当に起こったのかを客観的に叙述するという姿勢が静態的であると疑問視され、事実を解釈する者たちのあいだに生まれる齟齬や食い違いを直視し、そこに介入する政治性を考慮に入れる必要が多くの論者たちによって共有されている。こうした主張は、まさに歴史叙述の動態性を探る議論であると言えよう。七〇年代において歴史の表象論をリードしたホワイトは、八〇年代以降、ある意味では守勢に回り、こうした新しい文化批評の動向に関わらざるを得なかったわけである。そして、フィギュラル・リアリズムのアイデアは、そうした動向に対するホワイトなりの反応——ホワイト自身は脱構築主義には少なからず懐疑的であるようだ——とも読まれるべきであろう<sup>(43)</sup>。

さて、この項目の最後に短く言及したいのは、《認知意味論》と《文化の政治学》の隠れた関係である。この二つの潮流は八〇～九〇年代のほぼ同時期に英米の人文学界で勃興し、多くの人びとの注目と関心を集めたのだが、それぞれは全く違う場所で全く違う人びとによって議論されていた。ここで私が指摘したいのは、この時期、言語論と文化論はまったく乖離してしまった、ということである。このことは、構造論の場合と比較してみるといっそう明らかになる。構造主義言語学は、七〇年代を中心に文化記号論のような形で文化論に応用され、人文諸学に多大な刺激と影響を与えた。つまりこの時期、言語論と文化論は歩みを同じくしていたのである。それに比べると、八〇年代以降の両者の乖離にはどこか不幸な感じが拭えない。認知意味論も文化の政治学も、元々は同じような問題意識から出発したはずである——それらが自己形成の叩き台としたのは、生成文法や構造主義のような一種の普遍主義や客観主

義を掲げる（言語）思想である。科学的言語観への反発・批判という点において、認知意味論と文化の政治学は同じスタートラインに立っていたと見られる。だが、その後の展開は全く異なったものになってしまい、それぞれの対象、分析手法、主張には共通するものはほとんど見出せない。例えば、文化の政治学は自らのラディカルな政治的主張を前面に押し出すのに対して、認知意味論は政治や社会には全く無関心だ、といった具合である<sup>44</sup>。このような曖昧かつ雑駁な比較論は、それぞれの専門家たちにはナンセンスに思われるかも知れない。それであっても、なぜ私があるここで両者を並べるのかと言えば、それは言語論と文化論がかつてのように手を携えた方が人文諸学にとっては有益だろう、と考えているからである。

このことを私の議論に引き付けて言えば、次のようにもなる。つまり、文化の政治学にせよ認知意味論にせよそれぞれは、私の主題であるフィギュラル・リアリズムに少しずつ、かつ重要な示唆を与える形で関わっているゆえに、フィギュラル・リアリズムを更に鍛錬するためには、文化の政治学と認知意味論が歩み寄った方がよいだろうと考えられるのである。一方では、フィギュラル・リアリズムは文化の政治学に関わる論争の中から生まれたアイデアであり、七〇年代までの文化（表象）論の趨勢が陥った行き詰まりや難点を打開しようとしている。他方では、認知意味論はフィギュラル・リアリズムのアイデアを発展させる有望なヒントを与えている。こうした状況のなかで私は、認知意味論のような言語論とフィギュラル・リアリズムのような文化（表象）論との接点を何とか見つけたいと考えているのである。文化の政治学と認知意味論は、このような位相ですれ違いつつも位置しているように私には見えるのだが、どうだろうか。

④ 後期ホワイトのフィギュラル・リアリズムは何が問題なのか？

以上の整理と考察を踏まえ、後期ホワイトのフィギュラル・リアリズムの抱える問題、また、その更なる展開について、本節でのさしあたりの結論を出したい。

第一に、二十世紀西欧における文体論の全体像を踏まえるならば、『メタヒストリー』から《フィギュラル・リアリズム》へ至るホワイトの歴史哲学・歴史表象論の展開は、文体論的には、構造論から観念論への転換（あるいは宗旨変え）と位置づけられる。更に、構造（また表現）論の文体論と観念論の文体論のあいだには大きな乖離があることを踏まえるならば、中期ホワイトと後期ホワイトのあいだの齟齬はまた、二つの文体論のあいだのそれに由来することが分かる。

第二に、《フィグーラ》と《フィギュラル・リアリズム》が共に観念論の文体論の領野で発想されていることが確認されるならば、フィギュラル・リアリズムの抱える難点は、とりもなおさずフィグーラのそれでもあることが分かる。アウエルバッハのフィグーラがクローチェから引き継いだ《観念性》という特質はまた、ホワイトのフィギュラル・リアリズムにまで影を落としており、その展開を阻む難点に転化してしまっている、と考えられる。

第三に、フィギュラル・リアリズムの概念を手掛かりにして歴史や文化の表象（の多元性）を更に追究しようとするならば、ホワイトの採った逆行——二十世紀後半の構造論から二十世紀前半の観念論への——という方向とは逆に、文体論の動向を順行すること、つまり、言語学や文体論の新しい潮流に目を向けてみることも一つの可能性なのではないか、ということが浮かび上がってくる。そして、その具体的な対象としては、認知意味論や認知論の文体論が有力な候補となろう。

ここまで読解と議論を重ねてきてようやく、本節での議論が前節でのそれにつながるようになった。

#### 四 文体論のヴィーコ

これまで二つの節では、フィギュラル・リアリズムの概念の更なる深化にとって、延いては、歴史や文化の表象の多元性の追究にとって、《認知》の視座が有望らしいことを見てきた。この節においては、前節で私たちが扱った文体論の歴史的展開——《フィグーラ》から《認知》へ——を承けて、同じ道筋を少し別様に辿ってみたい。具体的な題材は、十八世紀イタリアの歴史哲学者ジャンバッティスタ・ヴィーコである。ここで着目したのは、ヴィーコの哲学はクローチェやアウエルバッハ（観念論の文体論）、ホワイト（構造論の文体論）、認知意味論（認知論の文体論）の三者に深い影響を与えている、という事実である。更に興味深いことに、彼らのヴィーコ読解は三者三様にそれぞれ少しずつ異なっている。これはつまり、複雑な多面体であるヴィーコ哲学の或る側面を彼らそれぞれが自らの思想の構築に利用しているということであろう。このことを逆に捉えるならば、彼らのヴィーコ読解の相違を整理することによって、彼らが歴史、言語、文化に対して持つ観方の特徴を浮き彫りに出来るだろう。この分析を通じて私たちは、認知論に通じるヴィーコ哲学の或る局面が文化多元論の進展に資するだろうことを示して、この論文の全体の議論に一つのまとまりをつけたい。

##### ① 観念論のヴィーコ——クローチェとアウエルバッハ

《観念論の文体論（言語美学）》学派のなかでヴィーコに関心を示すのは、クローチェとアウエルバッハである。クローチェにとってヴィーコは、人間の想像力を正当に評価した思想家である。アウエルバッハにとってヴィーコは、

人間に普遍的に備わった共通感覚への信頼によってフイグーラの歴史哲学を理論的に支える哲学者である。両者のヴィーコ観の特徴は——学派の名が端的に示すように——観念論的であることを特徴とするが、このことを別様に見るならば、彼らは言語自体の考察をあまり志向していない、あるいは、ヴィーコ哲学の中の言語論的な部分から眼を背けている、とも言える。これが観念論の文体論学派のヴィーコ観の特徴であり、かつまた弱点である。

まずはクローチエのヴィーコから。先にも見たようにクローチエは、人間の認識活動を《直観的なもの》と《論理的なもの》とに区分し、前者には想像力が後者には知性が関与しているとす。近代哲学の主流（認識論）が専ら論理や知性の探究であったことに反対しつつクローチエは、《直観》を彼の哲学Ⅱ美学の中心に据える。クローチエはまた、直観は《表現》や《言語》とも切り離せない、つまり、言語は論理的認識ではなく直観的認識の領野にあるとも考える。「表現のうちに客観化されないものは直観ではなくして、感覚である。精神は、作り、形成し、表現しなにかぎり直観しない」からである<sup>(45)</sup>。表現される時に「感情や印象は、ことばのおかげで、魂の暗闇から観照的精神の明るみへ移る」ともクローチエは言っている<sup>(46)</sup>。これらのことをクローチエはまとめて、《言語学と美学は同一である》というような言い方をしている。さて、クローチエがこのように近代の認識論に反対し自らの哲学の基盤に直観を置いたのと同じように、十八世紀のイタリアでは、ヴィーコがデカルトの認識論を批判し、人間の想像力を知性の圧制から解き放つ試みをしていた。ヴィーコは、主著『新しき学』（一七二五年、第一版）において、始まりの人間たち（原始人）が想像力を使って言語（詩）と観念を同時に創出してゆくプロセスを描いている。クローチエが直観や表現という概念で示そうとしたもの（人間精神の一次性、あるいは生の哲学）は、ヴィーコの哲学にあつては、人間の歴史的世界の始まりの様態、つまり太古の人間たちの原初的な想像力のあり方の中に探られている、とクローチエには映った。かくしてクローチエは、自らの哲学（言語美学）の起源をヴィーコの歴史哲学の中に見出すの

である。

次に、アウエルバッハのヴィーコ。『ミメーシス』の文学史観を支えるフィグーラ概念は、ヴィーコの歴史哲学とも深く関わっている。既に見た通り、アウエルバッハのフィグーラは、時空を隔てた二者のあいだに内的な連関をつける媒介物として機能する。フィグーラは元々は西洋古典におけるレトリックの概念であったのだが、アウエルバッハはそれを一種の歴史哲学として捉え直し、『ミメーシス』において彼が展開した西洋文学史の基盤に据えた。これがアウエルバッハのフィグーラについての一般的な理解であり要約なのだが、近年の研究によると、アウエルバッハがフィグーラ概念を焼き直す際に、ヴィーコの歴史哲学から影響を受けたらしいことが指摘されている——アウエルバッハ自身はヴィーコとの関係でフィグーラについて直接に語ることはないのだが<sup>(47)</sup>。端的に言うくと、ヴィーコとフィグーラをつなぐものは、ヴィーコの《共通感覚》の概念である。ヴィーコは、歴史的世界の探求にあたって、人間たちのあいだに遍在する共通感覚に依拠する。よく知られたヴィーコのテーゼ〈真なるものは作られたもの〉が示すように、〈神の世界は神が作ったものだから、神だけが理解することが出来るのに対して、人間の世界は人間が作ったものだから、人間だけが理解することが出来る〉とヴィーコは考える。ヴィーコの探究の対象は過去の人間の世界である。そしてここでは次の前提が重要となる——現在に生きる人間が過去の人間の世界に参入し、それを理解し再構築することが可能になるのは、人間には共通感覚が普遍的に備わっているからである。歴史的世界の探究の基盤に共通感覚を置くことによって、現在の人間は過去の人間の様態を思い描くことが出来る、とヴィーコは考えた。さて、フィグーラとは——先にも見たように——一種の媒介物である。フィグーラによって二者のあいだでより高い次元での総合が可能になるわけだが、それが可能になるのは、人びとや事物が時空的に遠く離れたところに位置している、人間のあいだには元々、共通感覚が普遍的に備わっているからである。共通感覚を持っているからこそ、

人間は歴史を通観して、より高いものへと達することが出来るのである。共通感覚に基づくヴィーコの歴史哲学は、こうしたことをアウエルバッハのフィグーラに示唆したようである。

このように、クローチエはヴィーコの想像力論に自らの哲学の直観の概念を重ね合わせ、また、アウエルバッハはヴィーコの共通感覚論にフィグーラに通じる媒介性を見てとる。前節で扱ったように、クローチエの《直観》やアウエルバッハの《フィグーラ》は、彼らの観念論の言語美学（文体論）の基盤をなす概念である。クローチエは、十九世紀の実証科学から哲学や言語学を救い出すべく、直観や表現などの概念を通じて、言語学と美学を有機的に一つのものとした。アウエルバッハは、そのクローチエの観念論的美学Ⅱ言語学（言語美学）を文体分析の領野において実践し、また、クローチエの《精神の哲学》Ⅱ《絶対的観念論》を《フィグーラ》の概念に取り込んだ。《直観》にせよ、《フィグーラ》にせよ、まことに観念論に色濃く染めされたアイデアであろう。こうして彼らは、観念論の言語美学Ⅱ文体論に通じる要素をヴィーコの言語・歴史哲学の中に発見し、それまで長いあいだ忘れられていたヴィーコを思想を二十世紀に力強く蘇らせた。彼らのヴィーコ論は、ヴィーコ研究史、また二十世紀思想史のいずれの文脈においても重要である。

そうした彼らの達成を十分に認めた上で私は、彼らのヴィーコ読解は、観念論を優先するあまり、ヴィーコの言語論にまで十分な目配りをするのを怠っている、と指摘したい。観念論の言語美学（文体論）は、言語論（学）の刷新を標榜しつつも、その中心にある観念論という視座は言語自体の分析を脆弱にすることに専ら貢献したような感じである。一例を挙げれば、ヴィーコは言語の本質を比喻に見ているが、クローチエたちは、そうした言語論的なヴィーコ思想の局面にはほとんど関心を示さない。いや、このように彼らを難じたところで、それはいわゆる後知恵のなせるものでしかないのかも知れない。観念論の言語美学（文体論）の最大の達成は、言語の中に人間の精神的創造の

所産を見出したことにあると見るべきなのだろう。つまり、言語美学は——フンボルトの著名な表現を借りれば——エルゴン（作品）ではなくエネルギー（活動性）としての言語に光を当てたことで今なお評価されるべきなのだろう。それであっても、いわゆる《言語論的転回》を経験した後の私たちにとっては、言語美学の分析方法や主張はいかにも古めかしく映るし、物足りなくも感じられる。

そしてヴィーコ研究は、ヴィーコの比喩と歴史の理論を正面から取り上げるホワイトの『メタヒストリー』において新しい局面を迎え、進展を遂げることになる。

## ② 構造論のヴィーコと文化の政治学のヴィーコ—ホワイトとサイード

『メタヒストリー』においてホワイトは、歴史叙述とレトリック（比喩）のつながりという視座から十九世紀西欧の歴史家の著作を分析したが、このアイデアを提供したのが、ヴィーコの『新しき学』であった。クローチェ・アウエルバッハのヴィーコ観が観念論的であることに比して、ホワイトのヴィーコ観は優れて言語論的である。しかしまたそれは、構造論全般に共通する難点、つまり記号論的分析の静態性を典型的に示すと批判されました。『メタヒストリー』の後、《表象としての歴史》あるいは《歴史のエクリチュール》という問題の追究は、ポスト構造主義の文化批評、特に、文化の政治学の潮流へと受け継がれた。文化の政治学の領野でヴィーコに関心を示すのはエドワード・サイードである。サイードは、《ヘテロトピア的主体》という概念を通じて、複数の文化の境界に立つ思想家としてのヴィーコ像を描く。それは、ポストコロニアリズムを代表する批評家サイードにまことにふさわしいものではあるが、ヴィーコ研究全体の中では異質である印象も拭えない。構造論的言語（レトリック）論に立脚する中期ホワイトと、ポストコロニアリズムの立場から異文化の表象や理解といった問題群を提起しているサイードのそれぞれのヴィ

ーコ論が互いに歩み寄り接点を模索すれば、より議論は充実しただろうとも思われるが、今となつてはそれを望むべくもない。ちなみに、私が次の項で最終的に支持したいと思つている《認知論のヴィーコ》は、ある意味では、そうした方向を目指しているとも言える。

ホワイトのヴィーコ論については、既に前節でその概略を整理したので、ここではその要点を復習するに留めよう。ホワイトは『メタヒストリー』において、十九世紀西欧の歴史家たちの作品を文体（レトリック）とイデオロギーの視点から分析したが、そうした記号論的な分析の基盤を提供したのが、比喩の四分類（隠喩―換喩―提喩―反語法）と歴史の展開との相関関係についてヴィーコが『新しき学』で示した理論であった。そして、ホワイトがそのようにヴィーコを発見することが出来たのは、ヤコブソンらの構造主義詩学がソシユール言語学を継承しつつ比喩の理論を洗練させ、それが文化論にまで適用可能であることを既に示していたからであつた。この意味において、『メタヒストリー』におけるホワイトのヴィーコ発見は構造論の言語学（文体論）の優れた達成であると評価できる。

また前節では、構造論に立脚する文化論がその静態性をポスト構造主義と呼ばれる諸思想によつて批判されたことを見た。歴史叙述論についても事情は同じで、ホワイトが提起した《表象としての歴史》という視座は、その後、《歴史を書くこと》に内在する《政治性》や《権力関係》をめぐる議論にとつて代わられた。この新しい議論を担つたのが《文化の政治学》を標榜する人びとである。この人びとが文体論やヴィーコの歴史哲学に興味を示すことは全くといってよいほどないので、この節で彼らにあえて言及する必要はないだろう。そうしたなかで唯一の、そして重要な例外がある。《観念論のヴィーコ》と《構造論のヴィーコ》と《認知論のヴィーコ》の三者の狭間にあつて異彩を放つ《文化の政治学 of ヴィーコ》とは如何なるものなのか？

サイードのヴィーコ論は、『始まり―意図と方法』（一九八五年）の終章で主として展開されている<sup>(48)</sup>。サイード

の言う《始まり》とは、原始の人間たちが言語と観念を同時に創出することによって文化と社会を構築し始めた太古の或る時点のことを指している——言うまでもなくサイドは、ヴィーコの『新しき学』を念頭に置いているわけだ。そしてサイドのヴィーコ像は、以下の三点に要約される——①「《始まり》ないし《始めること》の本源的な「異教性」についての最初の卓越した洞察者」としてのヴィーコ、②《始まり》の異教性から導き出される「《脱中心的な差異化的な反復》の可能性についての先駆的な考察者」としてのヴィーコ、③「トピカ的な《隣接の論理》の実践者」としてのヴィーコ<sup>(49)</sup>。

さて、サイドがヴィーコの《始まり》に読み込む異教性や脱中心化というトピックは、数あるヴィーコ論の中でもきわめて異色で独特なものだが、逆に言えば、そうした読解は、ヴィーコ思想に即した分析というよりかは、ポストコロニアリズムの旗手サイドが自身の思想をヴィーコに投影した結果だと見る方がよいのかも知れない。或る論者の解説によれば、異教性や脱中心化といったトピックは、「ヘテロトピア的主体」、つまり「相異なる二つまたはそれ以上の文化の交錯する境界線上にあつて、そのいずれとも関係をとりむすびながら、そのいずれにも帰属することなく、ひとつのヘテロトピア、いいかえれば《異他なる反場所》を形成しているような批判的知識人主体」という主題に連なっている、という<sup>(50)</sup>。つまりサイドは、ヴィーコをいわばポストコロニアリズムの先達者として位置づけている、というわけである。確かにこれは、非常に大胆かつ新鮮な視点であろう。日本ではヴィーコは、和辻哲郎や清水幾太郎の紹介を通じて、文化における言語や習俗の共同性を説く思想家と捉えられてきたことに比べると、サイドのヴィーコ読解の異色さも一段と際立つというものだろう<sup>(51)</sup>。私としては、その異色さ——鋭い批評性と、言ってもよいだろう——に大いに敬服するもの、その内実の批判的検証もまた必須であろうと考える。しかしながら、多くの人びと——西洋でも日本でも——は、サイドの桁外れに該博な学識と巧みな雄弁に、そしてまた、文化批評

の世界における彼の威光に圧倒されるあまり、そうした批判的検証までにはなかなか立ち行かないような感じである。そして私も同様に、サイードのヴィーコ論に少なからず当惑気味（あえて強く言えば、懐疑的）である。

私なりの批判的検証として、ここでは難しいのだが、ただここで指摘しておきたいのは、サイードのヴィーコ論におけるアウエルバッハの影であり、そして、アウエルバッハとサイードにおけるヴィーコ像の齟齬の問題である。この問題を考える際に手がかりとなるのは、《ヘテロトピア的主体》という主題がまた、サイードのアウエルバッハ論にも登場することであろう<sup>(52)</sup>。ここでサイードは、ユダヤの出自であるアウエルバッハが祖国ドイツを逃れ、イスラーム世界のイスタンブールで『ミメーシス』を執筆したという歴史的な事情を踏まえて、複数の文化の狭間に生きる知識人としてのアウエルバッハを描いている。無国籍の境界人というアウエルバッハ像は、実にポストコロニアル的なものであり、先のヴィーコ論にも通じていることは直ぐに見て取れるであろう。ところが、《ヘテロトピア的主体》としてのアウエルバッハを描くこの論には、アウエルバッハのヴィーコ（論）への言及は全く見当たらないのである。私が繰り返し強調してきたように、アウエルバッハにとってヴィーコは決定的に重要であるにも関わらず、サイードにとって《ヘテロトピア的主体》という主題はヴィーコとアウエルバッハに共通して重要性をもつにも関わらず、彼のアウエルバッハ論にヴィーコが登場しないのは、全くもって不可解である。サイード自身はこの問題に口を閉ざしているゆえに、真相は推測するしかないのだが、これはおそらくは、先に私が文体論という視野から取り出したアウエルバッハのヴィーコ論における《観念論》という特徴と、サイードが自身のヴィーコ読解で強く前面に押し出す《ポストコロニアル》的な性格とが基本的に相容れないからではあるまいか。もともとこれは、アウエルバッハ自身が『ミメーシス』ではヴィーコに関して積極的に語っていないということも大いに影響しているように思われるのだが<sup>(53)</sup>。《ヘテロトピア的主体》という視座自体は非常に魅力的であるし、現代の（多）文化論にも多くを示唆

しそうである。そうであってもヴィーコに即して見る限り、いかんせん裏づけが乏しいという印象は拭い難い。

私としては、ヴィーコの《始まり》は、サイドの言う異教性や脱中心性のような、ラディカリズム、あるいは異議申し立ての気味を幾分か帯びた概念よりかはむしろ、認知論——《言語》と《身体》のつながりのような即物的な視座——から捉えた方がよほど説得力を持ち得ると考える。また、認知論のヴィーコは、クローチエ以降の近代のヴィーコ論（研究）の成果と問題を踏まえることが出来る点でも、サイドのヴィーコ論よりも格段に多くのことを教えてくれるように思われる。そして、この認知論のヴィーコの検討が次項での課題となる。

### ③ 認知論のヴィーコ

ホワイトやサイドのような文化批評家たちがヴィーコについて語っていたのとはほぼ同じころ、まったく別の場所で、まったく別様にヴィーコが発見された——より正確には、ヴィーコが既に二百年以上前に考えていたこととときわめて類似したアイデアが提出されるに至った。八〇年代に登場した認知意味論と呼ばれる言語学の新潮流がそれである。ヴィーコと認知意味論は共に、言語の起源、身体、メタファーなどに関心を持つ。認知科学（言語）学者たちは未だにヴィーコの存在にあまり気が付いていないようだが、私は両者の親近性を指摘し、それを手がかりにして文化批評や歴史表象論の可能性を認知論の領野に求めてみたい<sup>(54)</sup>。

認知意味論については、既に第一節において、その概略を見た。ここでは、レトリック（比喻）について認知意味論が示す知見に焦点を絞ってみよう。認知意味論は、人間の身体性と結びついた比喻があらゆる言語活動の基礎であると考えられる。それはまた、人間は概念を形成するにあたって、自らの身体的・経験的な基盤に抛りつつ、具体的なものから抽象的なものへと理解を進展させてゆく、という考え方でもある。つまり、人間の認知メカニズムにおいては、

一次的な《感覚》がいくらかのまとまりを持つ《知覚》として捉えられ、その《知覚》が更に意味を持つ《認知》へと進化するというプロセスが働いている、と認知意味論は考える。認知のプロセスが感覚↓知覚↓認知という段階を経て進むことはまた、記号論的には、アイコン（一次性）↓インデックス（二次性）↓シンボル（三次性）という意味作用の発展のプロセスでもある。更にレトリック（比喩）の観点から言えば、このプロセスはメタファー（隠喩）↓メトノミー（換喩）↓シネクドキー（提喩）という展開とほぼ重なる。

次にヴィーコだが、非常に興味深いことに、認知意味論が提起する《認知の三段階説》は、ある意味では、十八世紀のヴィーコによって既に先取りされていた、とも見れる。ヴィーコは、始まりの人間たちにおけるこのところと言葉の発生、そして、その後の進化のプロセスについて、人間の意識が《深層》と《表層》に分かれ、その二つが《メタファー》によって媒介されているという構図で説明をしている。ここでは、あるヴィーコ研究者による整理を借りよう。

① こころの最深部では、想像力は、衝動や環境の刺激に対して本能的に反応すべくプログラム化されている情動的かつ知覚的な反応の世界を変化させて、アイコンの世界を生み出した。こうした記号が脳内に存在することは、意識の出現、つまり、存在や物体や出来事について思いを及ぼせる際に、それらが実際に起こったり存在したりする文脈から遠く離れた世界にあっても、それらに思いを及ぼせる能力の出現を意味していた。

② こうした原初的な意識の層の内部において、《インゲニウム》(ingegno) —— 個々の事物のあいだに類似関係を見出しつつ、それらを一つの《想像的普遍》へと連結してゆく能力——は、脳の持つさまざまなイメージを更に変形させて、それらのイメージのあいだに《結合》(connectedness) のモデルを生み出した。これが《始まり》の人びとにおける《メタファー》の機能である。

- ③ その後「メタファー」は、知覚による認知の対象 (percepts) を概念 (concepts) に転化させることによって、「思考のイコニックな深層構造」を表層における認知の形態へと変化させた——そして今なお変形させ続ける。
- ④ 原始人のところが現代人のところへと進化を遂げたのは、メタファー的に形成された諸概念が徐々に抽象的になって、感覚的な統御から引き離され、システムを安定させるべく構文が出現した時であった。近代人のところの中では、認知の表層の次元が思考を支配する形態となり、その結果、以前にもまして概念とその統語的な配置に依存するようになった意味のシステムが生み出されるようになった。想像力を介さない (literal) 言説とは、このシステムの産物である。(55)

このように、レトリック(比喩)の機能を中心として、認知意味論が示す人間の認知の進化のプロセスとヴィーコの《始まり》の構造は驚くほど似通っている。とするならば、この類似が何を意味しているのか、そして、それは何故なのかという問いが浮上せざるを得ないだろう。ここでその詳細に立ち入る余裕はないが、さしあたっては、十八世紀と二十世紀に生まれたこれら二つの言語思想が自らの立場を形成するにあたって批判と超克の対象としたのが、一種の合理主義の思想であったことだけは最低限押さえておかななくてはなるまい。認知意味論にとってそれは、チョムスキーなどの生成文法である。生成文法は、デカルト派言語学を標榜していることから分かる通り、言語の普遍原理を追究することを目指している。ヴィーコにとってそれは、理性の優位を説くデカルト主義であった。ヴィーコはデカルト主義に反発しつつ、歴史や言語を人間文化の考察の中心に据えた。認知意味論にせよ、ヴィーコにせよ、人間や文化の探究における普遍性や合理性を重視するアプローチの行き過ぎを懸念し、身体のような具体的あるいは一次的なものに根ざしつつ、言語を通して人間や文化の探究の道を探ろうとする点で同じ方向をとっていると見えよ

う。認知意味論とヴィーコとの遭遇は、二百年の時の経過を挟んではいても、決して偶然ではないのである。

認知意味論とヴィーコの親和性がかく確認されるならば、更なる議論の道筋としてはおおよそ二つの方向が考えられるだろう。第一の方向は、認知意味論とヴィーコが共有する視点——《認知論のヴィーコ》と呼んでおこう——を文体論の領野に応用することであろう。近年、認知意味論が認知文体論として展開されつつあることは、先にも触れた。この潮流は、文体論の領野における近年の大きな進捗である<sup>(56)</sup>。だが、認知意味論の場合と同様に認知文体論においても、人びとの眼はなかなかヴィーコにまでは向かないようである。ヴィーコ思想が文体論の領野にも深く関わっていることは、既にクローチエ、アウエルバッハ、ホワイトといった先達たちがそれぞれの立場から示している。そして、それらの《文体論のヴィーコ》がそれぞれに問題を抱えていることは、私が示した通りである。そうした諸問題を踏まえた上で、《認知論のヴィーコ》が何を教えてくれるのかを考えてみることは決して無駄ではあるまい。

これと関連しつつ第二の方向は、《認知論のヴィーコ》をより広範な文化論の領野に応用することであろう。そして私は、この方向にとりわけ関心を持つ。私の観るところでは、《認知論のヴィーコ》は、歴史や文化の表象の多元性をめぐる議論——もちろんフィギュラル・リアリズムもここに含まれる——に多くを示唆してくれるように思われる。私が现阶段で得ているのはごく大まかな展望に過ぎないが、それとて、ここまでの議論の総括としては役に立つだろう。私の考えを端的に述べれば、次のようになる。つまり、認知論のヴィーコが二十一世紀の文化論に示唆するのは、〈文化論は、身体と言語に根ざした人間の認知機能を媒介にして、文化（歴史）における普遍性と個別性（多元性）を調停できる〉ということではあるまいか。これはつまり、言語と文化（歴史）に関する相対主義的な考え方であるとも言え換えられる。もう少し敷衍しておこう。

まず、認知意味論が一種の言語相対論であることを確認しておきたい。これについては、先に見たヴィーコの《深層》と《表層》の二分類がその基盤になろう。一方では、言語の使用が人間（ホモサピエンス）としての認知能力に基本的に規定されている以上、人間の知覚や認知の能力と言語の運用との関係には、人間一般に共通する或る一定の普遍性が想定される。これが言語意識の《深層》である。他方では、それぞれの共同体で使用されている個々の様々な言語は、それぞれに独自の構造的特性（文法や語彙）を持ち、特有な文化的背景に規定されつつ限らない多様性を示している。これが言語活動の《表層》である。この二元性を踏まえて認知意味論は、〈言語の深層における普遍性と表層における多様性の相互交渉が言語のあり方を規定している〉と考える。これはつまり、いわゆる《サピアールフの仮説》（言語が認知を規定するという考え）が新しい形で蘇ってきたということでもある<sup>(57)</sup>。これを逆に言うならば、認知意味論は、二十世紀のサピアールフから十九世紀のフンボルトを経て十八世紀のヘルダーやヴィーコにまで遡る言語相対論の系譜に連なっている、とも言える<sup>(58)</sup>。私たちが《認知論のヴィーコ》という表現で言い当てるようにしているのは、こうした言語思想（家たち）におおよそ共通する考え——「一方においては意味の体系と統辞構造、そして他方では文化と民族、これらの間の連関にみられる相互性についての考え」——に他ならない。これがここで私が言う《言語相対論》である<sup>(59)</sup>。

そして、言語相対論は文化論の相対主義的な方向にも示唆を与えることが期待される。現代の文化多元論をめぐる議論では、《普遍》と《差異》を如何にして調停するかという問題がしばしば取り上げられる。著名な例では、チャールズ・テイラーの《平等な尊厳をめぐる政治》と《差異をめぐる政治》の対立などが直ぐに思い浮かぶ。これは、社会における文化の多元性の基盤となるのは、平等な人権のような普遍性にあるのか、それとも、文化的な差異に根ざした個別的な必要や要求にあるのか、という問いである。このどちらかを優先させるべきかという問題は、少し前に

北米社会で激烈に戦わされた《文化戦争》の例を挙げるまでもなく、基本的には決着を見ていない——そして同じような状況は世界中の至るところで見られる。テイラーの示す処方箋は、いわゆるガダマー的な《地平の融合》というものだが、それとて抽象的な域を出るものではない。

こうした現代文化の苦境とも呼ぶべき状況にあつて、《認知論のヴィーコ》という視座は、《普遍》か《差異》かという文化多元論の難題に何らかの示唆を与えてくれることが期待される。《認知論のヴィーコ》は、言語意識の深層と表層を媒介するものとしてレトリック（比喩）が重要な役割を演じていることを教えている。これはつまり、すべての人間たちに固有の本性として普遍的に備わっている《深層》と、差異や多元性に彩られた諸言語や諸文化という《表層》とを媒介するものとしての《レトリック》という考え方である。レトリックは、身体性という普遍的な基盤に根ざしつつも文化的な多様性を反映するという形で、人間の言語や思考と関わっている。現代における文化の多元性をめぐる議論に必要なのは、このような形で人間の本性に即しつつ普遍性と個別性を架橋することであり、その架橋には言語が深く関わっていることを人びとがもっと認識することであろう。《認知論のヴィーコ》が示唆するのは、おおよそこのようなことだと思われる。

## 五 結語——フィギュラル・リアリズムの前後を踏まえて

後期ホワイトがフィギュラル・リアリズムの概念によって模索している歴史や文化の表象の多元性という問題を更に深化させるべく、いくつかの考察を重ねてきた。まず、ホワイトが可能性を示唆している中動態について、認知意味論や生態心理学といった新しい認知科学が探索や公共性といった局面にその意味を見出していることを見た。そ

のことを踏まえて、フィギュラル・リアリズムの展開には《認知》の視座が有効なものではないか、という問題提起をまず私は行った。次に、認知科学と文化論のより強い接点を見出すべく、《文体論》と《ヴィーコ》というマクロの視座から、アウエルバッハのフィグーラやホワイトのフィギュラル・リアリズムの概念を位置づけ直す作業を行った。二十世紀の文体論については、観念論→構造論→認知論という流れがあり、アウエルバッハ、ホワイト、認知科学がそれぞれの学派のなかにあることを確認した。ヴィーコの場合も同様に、観念論（アウエルバッハ）、構造論（ホワイト）、認知論（認知科学）がそれぞれの立場から異なった風にヴィーコを読んでいることを辿った。この並行する二つの流れを整理して改めて確認できたのは、フィグーラの概念の観念論的性格はフィギュラル・リアリズムにまで深い影を落としていることである。これはまた、フィギュラル・リアリズムの概念によってホワイトは、文体論の流れを構造論から観念論へと逆戻りしている、ということでもある。この分析を踏まえて私は、ホワイトのそうした逆戻りの路線はあまりうまく機能していないのではないかと考えた。なぜならば、観念論の文体論は今となってはあまりにも観念論的であり、さほど言語論的ではないからである。ここで私は、文体論の流れを朔行するのではなく、むしろ順行した方がよいのではないかと、つまり、文体論の新機軸である認知論の成果に目を向けるべきではないか、という提案を行った。認知意味論は何よりも言語論として企図されているという点において、観念論とは（そして言語論である構造論ともまた）違った見方を示しているからである。認知意味論によれば、人間の言語活動は、身体や身体に根ざしたレトリック（比喩）を媒介にして、具体と抽象、個別と普遍のあいだを往来する認知活動である。そして、言語について認知意味論が示す知見はまた、歴史や文化の事象にも応用が出来るのではないかと、私は考える。歴史や文化の多元性という問題を追究するにあたって、いわば《コグニティブ・リアリズム》とも呼ぶべきものを考えてもよいのではあるまいか。これが私のさしあたっての結論である。

注

- (1) 吉田和久「近代の歴史主義と現代の文化多元論をつなぐもの——エーリッヒ・アウエルバッハの『フィグーラ』とその近代思想史的文脈」(一橋大学大学教育研究開発センター『人文・自然研究』第四号、二〇一〇年)。
- (2) Hayden White, "Auerbach's Literary History: Figural Causation and Modernist Historicism," in *Figural Realism* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1999), p. 99.
- (3) Hayden White, "Historical Emplotment and the Problem of Truth," in *Probing the Limit of Representation*, ed. Saul Friedlander (Cambridge: Harvard University Press, 1992), p. 50. 以下では拙訳によるが、日本語訳には次のものがある。ソール・フリードランダー(編)『アウシュビッツと表象の限界』(上村忠男・小沢弘明・岩崎稔訳、未来社、一九九四年)。
- (4) White, *ibid.*, p. 52.
- (5) White, *ibid.*, p. 48.
- (6) 注(1)に挙げた文献。
- (7) 中動態の研究史については、次のようなものが詳しい。エミール・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』(岸本通夫(監訳)みすず書房、一九八三年)。金谷武洋『英語にも主語はなかった』(講談社、二〇〇四年)。
- (8) 以下の整理(A)~(I)、①~⑤)は主として次の書物に拠った。本多啓『アフォードダンスの認知意味論』(東京大学出版会、二〇〇五年)。
- (9) 本多『アフォードダンスの認知意味論』二六頁。
- (10) 本多『アフォードダンスの認知意味論』六八頁。
- (11) ホワイトの業績の全体像を通観する試みは、次のような新しいホワイト論においてなされているが、ここでも同じような区分が行われている。Herman Paul, *Hayden White: The Historical Imagination* (Cambridge: Polity Press, 2011).
- (12) ピエール・ギロー『文体論』(佐藤信夫訳、白水社文庫クセジュ、一九五九年) 四六頁。

- (13) ジョルジュ・モリニエ『文体の科学』（大浜博訳、白水社文庫クセジュ、一九九四年）二八―九頁。
- (14) 小林英夫「美学と文体論」〔小林英夫著作集5 言語美学論考〕みすず書房、一九七六年）八四頁。
- (15) クローチエ美学とドイト観念論の関連については、例えば、次のようなものが詳しい。谷口勇「ベネデット・クローチエの表現学」〔クローチエ美学から比較記号論まで〕而立書房、二〇〇六年）。
- (16) ギロー『文体論』四八頁。
- (17) Erich Auerbach, "Epilegomena to Mimesis," trans. Jan M. Ziolkowski, in *Mimesis* (Princeton: Princeton University Press, 1953), p. 571.
- (18) Timothy Bahti, "Auerbach's Mimesis: Figural Structure and Historical Narrative," in *Allegories of History* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1992). Timothy Bahti, "Vico, Auerbach and Literary History," in *Vico: Past and Present*, ed. Giorgio Tagliacozzo (Atlantic Highland, N. J.: Humanities Press, 1981). なお私もまた、以上の文献に拠りながら、この問題を整理・考察した点がある。Kazuhisa Yoshida, "The Interplay Between Philology and Modernity: Some Considerations on Erich Auerbach's Concept of Figura," in *Hitozubashi Journal of Arts and Sciences*, vol. 50, No. 1, 2009.
- (19) この問題について、あるヴィーコ研究者は次のように書いている。「ヴィーコをイタリアのヘーゲルと見ようとするクローチエの関心は、彼【クローチエのこと、引用者注】の研究『ジャンバッティスタ・ヴィーコの哲学』（一九一一年）——イギリスの観念論者R・G・コリングウッドによって翻訳されている——の基盤になっている。（中略）ヴィーコとヘーゲル主義が結び付けられることによって、ヴィーコ研究は二十世紀へと開かれたが、それはまた、ヴィーコが観念の哲学の眼を通してのみ観察される時代の始まりでもあった。最も優秀なヴィーコ解釈者の多くは永劫の号罰を受け、自らの見解を自由に発表する権利を抑制してしまった。」Donald Philip Verne, *Vico's Science of Imagination* (Ithaca: Cornell University Press, 1981), p. 23.
- (20) Paul, *ibid.*, chapter 6. David D. Roberts, "The Stakes of Misreading: Hayden White, Carlo Ginzburg, and the Crocean Legacy," in *Historicism and Fascism in Modern Italy* (Toronto: University of Toronto Press, 2007).

- (21) クローチエのヴィーコ論に即して、クローチエを批判した次のような一節などがその典型例であろう。「確かにクローチエは十九世紀の観念論の哲学を純化し、それを「實在論的」なものにし、そして、自らに対して更に「批判的」であるように仕向けたと主張した。しかし結局のところ彼は、その地平の中に留まっていたのである。」 Hayden White, “What Is Living and What Is Dead in Croce’s Criticism of Vico,” in *Tropics of Discourse* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1978), p. 228. ホワイトのクローチエ観の変遷については、注(20)に挙げた文献が詳しい。
- (22) ギロー『文体論』四六頁。
- (23) ギロー『文体論』四七頁。
- (24) ギロー『文体論』五三頁。
- (25) ギロー『文体論』五四頁。
- (26) 小林英夫「言語美学」(小林英夫著作集5 言語美学論考) 六五頁。
- (27) 小林「言語美学」六五頁。
- (28) ギロー『文体論』五六頁。
- (29) 小林「言語美学」六五頁。
- (30) Talbot Taylor, *Linguistic Theory and Structural Stylistics* (Oxford: Pergamon Press, 1980), p. 44.
- (31) Taylor, *ibid.*, p. 44.
- (32) テレンス・ホークス『構造主義と記号論』(池上嘉彦他訳、紀伊国屋書店、一九七九年) 一一九―二〇頁。
- (33) ホークス『構造主義と記号論』一二〇頁。
- (34) ホークス『構造主義と記号論』一〇九頁。
- (35) ホークス『構造主義と記号論』一一一頁。
- (36) ホークス『構造主義と記号論』一一一頁。
- (37) ホワイトのヤコブソンへの言及の例は、『メタヒストリー』の序章。

- (38) 比喩の二分法と四分法の違いについては、次の文献に詳しい言及がある。中村雄二郎「記号・論理・メタファー」(『中村雄二郎著作集 第X巻』岩波書店、一九九三年)。
- (39) 斎藤兆史「文体論の歴史と展望」(中島平三(監修)『シリーズ朝倉〈言語の可能性〉10 言語と文学』朝倉書店、二〇〇九年)二二二頁。
- (40) ドミニク・ラカブラ「歴史記述の詩学」(『思想史再考』山本和平・内田正子・金井嘉彦訳、平凡社、一九九三年)。ロイド・S・クレーマー「文学・批評・歴史的想像力——ヘイドン・ホワイトとドミニク・ラカブラの文学的挑戦」(リン・ハント(編)『文化の新しい歴史学』筒井清忠訳、岩波書店、一九九三年)。
- (41) この問題を扱ったものとしては、例えば、次のようなものがある。Robert Young, *White Mythology* (London: Routledge, 1990)。
- (42) とはいえ、この《歴史叙述の政治性の脱構築》が具体的に何を意味しているのかとなると一向に明瞭ではないところが、文化の政治学が抱える弱点であり限界であるようだ。脱構築批評や文化の政治学のような左翼的な文化批評は、既成の文化秩序を批判することには大きな成果を挙げたが、代案を出したり、新しい文化を創造したりすることは不得手なようである。
- (43) ホワイトの脱構築批評に対する批判については次のようなものがある。Hayden White, "The Absurdist Moment in Contemporary Literary Theory," in *Tropics of Discourse*。
- (44) 言語学者たちのあいだではあまり議論されてはいないようだが、認知意味論の基盤を築いた言語学者ジョージ・レイコフなどはまた、徹底したりベラリストであり、文化相対主義の支持者であるようだ。例えば、次のような力強い一節。「ウォーフに関して忘れてはならない非常に重要な事柄が一つある。彼は、ナチズムがヨーロッパで隆盛になり、アメリカで好戦的愛国主義が流行していたのと同時期に自分の仕事の大部分を行ったのである。その当時、合衆国の多くの地域でさえも、白人は肌の色の異なる人よりも知能が高いと考えられていた。西洋の文明は知的到達度の頂点にあると考えられており、他の文明はそれに比べて劣っていると考えられていた。「文化」とはヨーロッパとアメリカの文化という意味であり、ホピの文化やバリ族の文化という意味ではなかった。(中略) インディアンたちの概念体系が科学的現実により良く適合し、われわれ

れが彼らから学ぶところがあるというような考えは想像もつかない、という状態に近かった。【改段落】ウォーフは言語学における開拓者というだけではなかったのである。彼は人間としての開拓者だったのである。このことは忘れてはならない。」ジヨージ・レイコフ「ウォーフと相対主義」〔認知意味論〕池上嘉彦・河上誓作他訳、紀伊国屋書店、一九九三年）四〇三―四頁。

- (45) 小林英夫「文体論の美学的基礎づけ」〔小林英夫著作集7 文体論の建設〕みすず書房、一九七五年）二六二頁。
- (46) 小林「文体論の美学的基礎づけ」二六二頁。
- (47) この問題については、注(18)に挙げた文献が詳しい。
- (48) Edward W. Said, *Beginnings: Intention and Method* (New York: Columbia University Press, 1985). エドワード・W・サイード『始まりの現象』(山形和美・小林昌夫訳、法政大学出版会、一九九二年)三〇二頁。
- (49) 上村忠男「ヴィーコの懐疑」以後〔『バロック人ヴィーコ』みすず書房、一九九八年)三〇二頁。
- (50) 上村「ヴィーコの懐疑」以後」三〇三頁。
- (51) 和辻哲郎「近代歴史哲学の先駆者——ヴィーコとヘルダー」〔和辻哲郎全集 第八巻〕岩波書店、一九六二年)。清水幾太郎『倫理学ノート』(岩波書店、一九七二年)。
- (52) Edward W. Said, "Erich Auerbach, Critic of the Earthy World," in *Boundary 2*. 31. 2, 2004. 日本語訳には次のものがある。  
エドワード・サイド「エーリッヒ・アウエルバッハ『シメーシス』について」(村山敏勝・三宅敦子訳『人文学と批評の使命』岩波書店、二〇〇六年)。
- (53) サイドのアウエルバッハ論に触発された批評家たちが、サイドの示した視座を深める議論を試みているのだが、その彼らとて、本丸たるヴィーコにまではなかなか攻め込めないような感じである。具体的な文献については、注(18)で掲げた私の論文をご覧ください。
- (54) ヴィーコと認知言語学(意味論)についての本格的な研究は、以下に挙げるマルセル・ダネシの一連の著作が注目に値する。  
Marcel Danesi, *Vico, Metaphor, and the Origin of Language* (Bloomington: Indiana University Press, 1993). Marcel

- Danesi, *Giambattista Vico and the Cognitive Science Enterprise* (New York: Peter Lang, 1995). *Giambattista Vico and Anglo-American Science*, ed. Marcel Danesi (Berlin: Mouton de Gruyter, 1994). また、日本の認知言語学者がヴィーコへ言及している例としては、次のものが管見に入った。大堀壽夫『認知言語学』（東京大学出版会、二〇〇二年）二四七―九頁。
- (55) Danesi, *Vico, Metaphor, and the Origin of Language*, p. 56. なお、「インゲニウム」についての説明（「個々の事物のあいだに類似関係を見出しつつ、それらを一つの《想像的普遍》へと連結してゆく能力」）の部分は、引用者による補足的な挿入。
- (56) ピーター・ストックウエル『認知詩学入門』（内田成子訳、鳳書房、二〇〇二年）。ジョアンナ・ゲイヴィンス、ジェラード・ステイン（編）『実践認知詩学』（内田成子訳、鳳書房、二〇〇三年）。認知文体論への日本の文体論研究者の言及としては、注（37）に掲げた斎藤兆史「文体論の歴史と展望」が管見に入った。
- (57) 光延明洋「言語相対論」（宮岡伯人（編）『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社、一九九六年）二〇二―四頁。
- (58) 認知言語学（意味論）と言語相対論については、例えば、次のようなものが詳しい。有馬遊子『パースの思想 記号論と認知言語学』（岩波書店、二〇〇一年）。
- (59) トウリオ・デ・マウロ『意味論序説』（竹内孝次訳、朝日出版社、一九七七年）七二頁。